AJCC　研究会報告

「そっくり、もしくは似た者カメラ」

2017年3月11日

於：JCII6階会議室

会員番号1006　　中原 寧之

今でこそ工業製品の外観デザインが重要な要素、価値として認識されているが、カメラに於いては嘗て、我が国の技術のレベルと商品価値からドイツ製有名カメラを模範として、外観デザインのみならず、機構的にもそれに近づけること、コピーすることに価値があった時代があった。バルナックライカ、ローライコード、イコンタその他に多くのコピー機がみられる。

1) 戦後1950年代まで、工業製品の外観デザインの価値に対する認識が希薄であった。
2) 戦後、日本の工業製品が力をつけて、輸出が増えるに伴い外国製品の模倣が問題になった。
3) デザインの創造性の価値認識を啓蒙し、模倣問題を防止するために、時の通産省が1957年に「グッドデザイン商品選定制度」、通称「Gマーク制度」を制定した。これが現在のグッドデザイン賞の前身。
4) カメラ業界では「キヤノンL1」が初回のGマークに選定された。

その後も1959年頃まで、外国製品の模倣は後退した一方で国産カメラのヒット商品、名機を国産カメラメーカーが主に外観デザインを模倣するという興味深い現象がみられる。

輸出、特にアメリカ市場を意識したものと思われる。ここでは、戦後のカメラメーカーが淘汰される前の、国産カメラメーカーが国産カメラを模倣したものを主体に取り上げる。

＜＜　そっくりカメラの部　＞＞

ニコンS2のそっくり

ニコンS2は1954年にS型から大きな飛躍を遂げて登場し、特に米国市場で好評を博した名機。よってバルナック型ライカ以外では唯一と言ってよいぐらいにコピー機が続出した。極めつけは、コンドル　メルコン　タナックのそっくり御三家である(写真1)。

コンドル(写真2)は外観的には最も近いが、ニコンS2とは全くクラスの異なるレンズシャッター中級機にて、まさしく模倣の為の模倣である。横巾、高さ、距離計ファインダーの位置まで同じ。ニコンがS2からSPに変身したのに合わせて、コンドルも次のモデルV2では、後述のごとくニコンSP風のデザインに変更するという徹底ぶりである。

メルコンⅡ(写真3)はフォーカルプレーン、ライカLマウントレンズ交換機である。前のモデルはバルナックタイプであるが、ニコンS2風に一転した。距離計基線長をニコンより長くしたり、裏蓋を開閉式にし、ボディの基本形状をバルナック風の両端を半円状にして、ニコンS2との違いを演出しているが、一軸2段のシャッターダイヤルとか、等倍式ファインダー、操作部の基本的位置はS2と同じで、標準レンズもニッコールであり、ニコンS2のLマウント版と言える。サイズが一回り大きくなり、間延びした印象が残念。なおメルコン名のカメラはこれが最後となった。

写真 1ニコン S2(前)にそっくりのカメラたち
左から時計回りにタナックSD、コンドル、メルコンⅡ

写真 3　メルコンⅡ(1957年、目黒光学)とニコン S2(1954)

写真 2　コンドル(1957年、コンドルカメラ)とニコン S2(1954)

写真4 タナックSD(1957年、田中光学工業)

写真 5　左:トプコン35S(1956年)、右:タロンⅡ(1957年、日本光測機工業)

写真 7　左:ドルカⅡ(1953年、東京光研)、右:コニカⅡ(1951年)

写真 6　左:シルバーフレックスS(1953年、日本光機)と
中央:リコーフレックスⅥ型(1953年)と右:フィルム装填枠
(このリコーフレックスⅥとシルバーフレックスは宇田川武良会員の所蔵品)

タナックSD(写真4)はフォーカルプレーン、ライカLマウントレンズ交換機で、形状寸法はニコンとほぼ同じであるが、3機種の中では外観、機能共に最も独自性はある。

等倍ファインダー、パララックス自動修正でニコンを上まわる。レリーズボタン周りのリングがシャッター低速調整ダイヤルとなっており、一工夫がある。前のモデルはバルナックタイプで、次のモデルV3型では、後述のごとく一転キヤノンL1風に変身する。

トプコン35Sのそっくり

トプコン35Sは先代の35Bとはがらっと違ったコンセプト、デザインで1956年に登場した。従来のレンズシャッター機には無かった、洗練されたデザインと高級感のある仕上げ、等倍ファインダー、トプコールレンズの評価で好評を博した名機である。これに追従したのが、タロンⅡである(写真5)。タロンもまた前モデルとつながりもなく、トプコン風に変身した。正面から観た印象では、トプコンと殆ど区別が付かない。当時のアサヒカメラ誌上で、トプコンのダイカストの流用疑惑が取り沙汰された程に基本骨格が似ている。内容的には、トプコン同様、等倍ファインダー(視差自動補正はない)、レンズはトプコンの44mm F2に対して42mm F1.9と頑張っており、捨てたものではない。多少は気が引けたのか、途中で前面のファインダー部のプレスラインを微妙に変更している。トプコンのレンズシャッター機は、以降は一眼レフにシフト、タロンは以降のモデルでは、模倣からの脱皮を図った。

リコーフレックスのそっくり

リコーフレックスは大衆価格で良く写るカメラとして一世を風靡したカメラで、板金製で構造も簡単なために多くの似た者カメラが登場したが、多くは構造、外観ともに多少変更を加えている。その中で、リコーのⅥ型とほぼそのままと言えるのがシルバーフレックスSであろう(写真6)。シャッター、レンズユニットは違うが、裏蓋の構造、留め金具も同じ。フィルム装填枠も同じでリコーと互換性がある。部品とか塗装に微妙な違いがあるので、同一カメラのネームプレートの変更では無く、意図的なコピーと思われる。シルバーフレックスはこの一代限りである。

<<　似た者カメラの部　>>

コニカⅡとドルカⅡ(写真7)

ドルカⅡの、コニカⅡの特徴的なフロントエプロンとそっくりの形状に注目されたい。ドルカⅡはこのモデルからコニカ風エプロンに変更して、更にコニカの“T”露出ダイヤルの位置にシンクロターミナルを設ける等はっきりとコニカⅡを意識していると思われる。ドルカのこのエプロン形状は、このモデル一代限りである。

キヤノンL1と
オーナーSL、タナックV3 (写真8)

キヤノンL1(1957)は初回Gマーク選定モデルにふさわしく、モダンな整った外観デザインである、凹凸が多く軍艦部と呼ばれた上面を平坦に整えたことと、ファインダー周りの処理に注目。オーナーも前身はバルナックスタイルで、このオーナーSLでキヤノン風になり、これを最後にオーナーブランドは途絶えた(写真9)。タナックは前述のモデルSDのニコンS2ソックリから、キヤノンL風のV3に変身。中身はスペックダウンである。次のモデルVPでは、ファインダーを明り取り窓式に変更する事によって、印象が変わった(写真10)。

ライカM3とアイレスⅢC、ペトリオートメイト

ライカM3は衝撃的に登場したカメラであり、他の追従を許さない高度な技術的内容と特許で固められていた事も有り、さすがに同クラスのコピーらしきものは、中国でごく少量生産された紅旗のみであるが、国産レンズシャッター中級機に雰囲気の似たものがある。

アイレスⅢC(写真11)は前後のモデルを含めて、この機種のみボディ端が半円形状になり、前面の小レバー類、エプロン、大きな三つ窓等でM3風の雰囲気が醸し出されている。

一般的にはアイレスⅢCがM3類似で取り上

写真 8 上:キヤノン L1(1957年)、下左:タナックV3(1958年　タナック光学)
下右:オーナーSL(1959年　瑞宝光学精機)

写真 9 上:バルナックタイプのオーナー
下左:キヤノンL1タイプのオーナーSL、下右:キヤノンL1

写真 10　左:タナックV3(1958年)と右:タナックVP(1959年)

写真 11　左:アイレスⅢC(1956年)と右:ライカ M3

写真 12 左：ペトリオートメイト（1957年） と右：ライカ M3

写真 14 左：アニー10スーパー（1960年、豊栄産業） と右：アニー10

写真 13 左：コンドル V2（1959年）と右：ニコンSP(1957年)

写真 15 左からロイヤル35S、コンタックスⅡa、ロイヤル35P

げられるが、むしろペトリオートメイトの方がM3の面影が濃い様に思える（写真12）。このモデルのデザインもまたこの前後のモデルとのつながりがなく突然変異的だが、ボディ本体は次のモデルのペトリF2と共通点が多く、軍艦部の形状のみM3類似形状とし、巻上げレバー、三つ窓式ではないが大型のファインダー等でM3風になっている。少数の生産に留まったのか意外と知られていない。

ニコンSPとコンドルV2、アニー10 スーパー

ニコンSPは、ライカM3を超えるべく登場した国産最高峰のカメラであり、これも同クラスの模倣機は存在せず、外観デザインのみの模倣機として、前出のレンズシャッター機、コンドルV2と、ボルタ判初級カメラのアニー10スーパーのみである。

コンドルV2はファインダーを明り取り窓式にするに際して、S2ソックリの前モデルの軍艦部を嵩上げしており、ニコンとはプロポーションが違う。前モデル程にはそっくりではないが、明らかにSP風を狙っている（写真13）。

アニー10スーパーはニコンSPとは比べるべくもない、おもちゃカメラの類であるが、はっきりとニコンSPを模している（写真14）。アニー10スーパーの前身のアニー10はコンタックス風。距離計の窓に見える小窓はシャッターロックの赤表示窓である。アニー10スーパーでは軍艦部にシャッターダイヤルを設けるなど、SP風を更に徹底している。

コンタックスⅡa、ニコンS2風のカメラ達

ロイヤルカメラにはロイヤル35S、ロイヤル35Pや輸出ブランド等、多数の派生モデルがあるが、いずれもコンタックスⅡa風である（写真15）。ネオカ（写真16）は当初からコンタックス風を踏襲し、ⅢSではニコンS2を意識している事が見て取れる。

ヤシカ35は、二眼レフで一時代を築いたヤシカの初めての35mmカメラである（写真17）。レンズが優秀で写りは定評があったが、外観はコンタックスⅡaを意識したものと思われる。

同じ年に発売の二眼レフヤシカ44が米国でベビーローライとの類似性で問題となった。この後のモデルからは違ったデザインに脱皮した。

<< 番外編 >>

ニコンSP、ライカM3とレオタックスG

レオタックスGは前のモデルまではバルナック風を踏襲してきたが、このモデルから基本的にはライカM3を意識し、単独広角ファインダーの内蔵と横長ファインダー枠はニコンSPを意識したものと思える（写真18）。はっきり模倣とは言えないが、強く影響を受けたものとして取り上げた。これを最後にメーカーが倒産し、後継機はない。

エタレタとモンテ35A

1953年発売のモンテ35Aは明らかにチェコETA社製のエタレタ（1946）、同Ⅳ（1948）にそっくりと言える（写真19）。チェコ製のカメラを5～9年遅れで模倣した意図は解らないが、エタレタはオペマ、フレクサレットで知られるメオプタから販売された様なので、そこそこに販売量も多く、輸出市場ではエタレタ風に価値があったものと思われる。シャッターリリース等、細部に違いはありそのままではないが、形状、寸法、機能の類似もさりながら、エタレタの外観の特徴の一つが、無垢のアルミを削りだしたかの様な仕上げに有るが、モンテも同じであり、裏蓋の留め金具も同じである。

写真 16 ネオカ各種（左列）とコンタックスⅡa、ニコンS、S2（右列）

写真 18 左からニコンSP、レオタックスG（1961年）、ライカM3

写真 17 左：コンタックスⅡa（1950）、右：ヤシカ35（1958年）

写真 19 左：モンテ35A（新世光機）、右：エタレタ